



タンザニア南部のイリンガ州カレンガ村で暮らし始めて1年がたった。私の任地では「バギア」という軽食が朝食として親しまれている。すりつぶしたササゲ豆を油で揚げたもので、手のひらに収まるサイズ感が手軽でちょうどいい。砂糖たっぷりの温かい紅茶と一緒に食べるのが定番だ。カレンガ村のバギアは村外でも人気があり、バス

「バギア」食べ始まる朝



タンザニア
糸原佑那さん(27)
三次市出身



で10時間ほどかかるタンザニア最大都市ダルエスサラームへも、毎日届けられているという。住民たちは誇らしげにその話を聞かせてくれる。会話の節々に混じるのは、彼

らの民族語「へへ語」だ。私が理解できずにいると、根気強く教えてくれる。そんな温かい姿を見ていると、故郷の広島県を思い出す。地域の食や言葉が日常に溶け込んでいる雰囲気、どこか似ているのだ。ある日、バギアを作っている女性に、おいしさの秘訣を尋ねてみた。「川の

水で豆を洗っているからよ」と、彼女は誇らしげに笑った。自宅から徒歩5分ほどの場所を流れるその茶色い川は、やがてタンザニア中南部を流れるグレートルアハ川へとつながっている。川辺では女性たちがバギア用の豆を洗いながら語らっている。その数分先では、住民たちが洗濯をし、牛が水を飲み、子どもたちが遊んでいる。またある人は魚をとり、農家の人たちはボンプでその水をくみ上げ、畑へ送っている。

バケツを持って生活用水をくみに来る人たちもいる。両手に一つずつ、そして頭の上に一つ、全部で三つのバケツを軽々と水をこぼすことなく運んでいく。人々の営みが、この川とともに確かにある。お隣さんから漂うバギアの香りを楽しみながら身支度をし、出来たてのバギアを朝食に食べ、いつもの川辺を眺めながら出勤する。「セカリンガ!」と民族語の名前で呼びかけられ、へへ語で朝のあいさつをして今日も1日がスタートする。気づけば私もこの土地の暮らしに少しずつなじんできた。遠い異国だと思っていた場所は今、「第二の地元」になり始めている。